

新時代

第 5 号

昭和 41 年 12 月 1 日

発行所 日本盲人福祉研究会
(文 月 会)

大阪市東淀川区東三国町 2 の 20

目 次

巻頭言「筆力に期待」	本 間 一 夫	1
我が憂うべき教科書	春 日 光 春	2
学習上の問題点	宮 昭 夫	6
点字技能検定協会の設立を提唱する	茂 木 幹 央	11
満 5 才を迎えた，わが会への期待	勝 川 武	14
決議処理実行委員会 中間報告	松 井 新二郎	19
盲関係福祉施設における職員数と 瞎盲の比率調査集計		22
第六回例会報告	高 橋 実	25
編 集 後 記	高 橋 実	30

巻頭言 「筆力に期待」

本 間 一 夫

日本盲人福祉研究会は充足してまる五年。このほど第六回目の例会を盛会裡に終った。いつの間にか、私が会長に祭りあげられてからでも二年である。この間、会は若い委員諸氏の情熱と努力とによって見事に運営され、会長はいたって気楽。私は、そのことを心から喜んでいる。ところで会活動として、いろいろなことがなされてきた。その一つ一つは、それぞれに意味を持って来たのだろうが、私が最も高く評価したいのは、この「新時代」の点字と墨字での発行である。その都度、熟読してきているがほんの僅かな例外はあったかも知れないが、一編一編なかなかの力作で、その内容に啓発されたばかりでなく、その執筆者個人への新たな敬意と関心とを覚えるのであった。さすがに人材が、集っていることを誇りにも思った。決してお世辞ではない。こう書くことによって、委員諸氏にもそのことを認識し、自覚して欲しいとさえ思うのである。そこで、私は思うのであるが、今後は委員諸氏の筆力によって、ただ本紙を充実発展させるばかりでなく、己が信ずるところ、思うところを大いに外に向けて発表し、訴えてほしいのである。点字毎日や他の点字雑誌は勿論、盲人の時間なども結構である。更に、そうした盲人対象のものばかりでなく、広く社会人の目にふれ、耳に入る方法をとることをおすすめする。新聞の投書欄などには、盲人問題がもっともっと取り扱われていい筈である。記者の立場で書いたものは、よく見かけても盲人自身の主張が殆ど無いことが、私はいつも残念に思っている。昭和の初め社会強化運動の先覚者として有名だった、山下のふよし先生は当時の青年に向って「一人一研究」を提唱し、その運動を力強く推進されたと聞く。これは学ぶべきことであって、今日の社会にも通じるし、盲人社会には特にピッタリする必要なことではないだろうか。私はこのごろ講演に出掛ける機会が多いのだが、そんな時「失明者の福祉に生涯を費やしたいと願う自分にとって、解決すべき問題がなお沢山残されていることは幸せなことだ」と実感を述べるのだが、事柄の大小にかかわらず、いや、どんな小さなことでもいいのだ。未解決、未開拓の問題が山と積まれている今日、それぞれにふさわしい一研究課題を選ぶことは決してむずかしくないのである。そして、その研究の結果を性質によって、あるいは

盲人社会を、あるいは一般社会を対談に発表し、呼びかけ訴えて欲しいのである。弁論活動がどんなに大きな力を持つかは、今更ここに言う迄もあるまい。社会に優れた足跡を残した先輩達の多くは、時盲を問わず、まさしく言論人であった。失明はわれわれの日常生活に確にいろいろな不利をもたらす。読むこと、学ぶことにも、まだまだハンディキャップは大きい。然しテーマを決め、目標を定めて少し時間をかければ資料を集め勉強することは出来よう。殊に「考えること」「書くこと」にはわれわれの場合も何らハンディキャップは無い。有るとしてもそれはさしたることではあるまい。そういったところから会本来の活動も出発するのではないだろうか。派手な政治的活動も勿論結構であろう。将来は会員の中から日盲連の幹部クラスがぞくぞくと出るであろうことを、私は期待もし願っている。然し、この会それ自体は名称の示す通り盲人の福祉（私は教育をも含めて考えたい）の研究会であって欲しいのである。そこにこそ、この会の我が国盲人社会に於ける特殊性があり、存在の意味があるのではないだろうか。（筆者は日点図書館長、本会会長）

我が「憂うべき教科書」

春 日 光 春

「先生愛です。僕のと違います」

中学二年の国語の時間である。教科書は、金田一博士の「心の小径」の一節にくると、決まってこんなストップがかかる。点字の者に読ませているとすみ字の生徒から、すみ字の方を読ませていると点字の者からといった按配である。「違くて、どこが？」と一応僕はとぼけて見せる。「ここです」と勢い込んで読みだすのをひととおり聞き終えてから「じゃ君、もう一度読んでごらん」と前の読み手に再度読みかえさせる。「心の小径」——この文章は筆者金田一博士がアイヌ語採集のため、単身カラフトにおもむき、言葉が通じるようになるまでの苦心と言葉と心がついに通い合うようになった時の喜びとを綴ったものであるが、問題の箇所は博士が現地に着いてはみたものの一語も通じないままにアイヌの人々から

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

新時代 第五号

昭和四十一年十一月三十日印刷
昭和四十一年十二月五日発行 (非売品)

発行所

大阪市東淀川区東三国町二ノ二〇
振替口座 二七五八八番

日本盲人福祉研究会

(文月会)

発行人

「新時代」編集委員会